

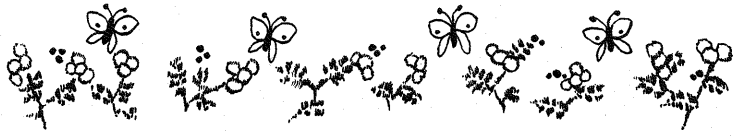
『幼児の教育』と私

『幼児の教育』一〇〇巻に寄せて

—第五十六〜六十四巻ごろの編集員の思い出—

木原 溥子

一九五七年八月より私は、池戸允子さんの跡を継いで『幼児の教育』誌の編集実務をお手伝いすることになった。北村雅子さん、私の次に担当された井上直子さんと一緒に仕事をした時を含めて九年ほどになる。この頃の日本は幼児教育が普及し、幼稚園の数も増えて、その教育内容を充実されることが求められていた。それに応えるように社会の子どもに対する理解も進みつつあった。また、児童学——即ち、児童心理

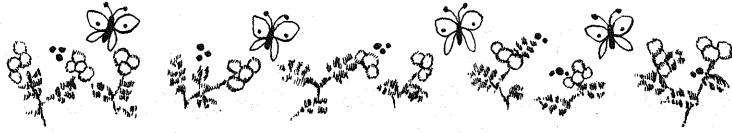


学、小児保健、臨床心理、精神衛生、福祉など——の分野での進歩も著しく、人間に直接間接に関係するものは殆ど保育の世界とのつながりが認められた時代でもあった。

月一回の編集会議は附属幼稚園園長室で行い、及川ふみ先生（お茶の水女子大学を定年になられた後は坂元彦太郎先生に代わる）と津守真先生がおられ、編集実務係として私が列席していた。私は両先生の学識の広さには毎回、敬服させられていた。津守先生が「次号にはこういうものを」ときばきと提案されると、及川先生が賛同された。また及川先生も「○○先生にこういうことを書いてもらいましょう」と提案される——打てば響くような進行で次の編集内容がまことにスムーズに決定されたものである。坂元先生が附属幼稚園園長として編集スタッフになられてからも同様であった。

『幼児の教育』の倉橋先生以来の編集方針に関しては、本誌一月号に津守先生が書いておられるが、一貫して保育の精神を伝えているという姿勢は、きびしく保たれてきた。

この仕事に自分もかかわっているという喜びは大きかったし、微力ながら責任も感じていた。原稿を頂戴することに新鮮な感動をもって読み、割付をしたものであった。

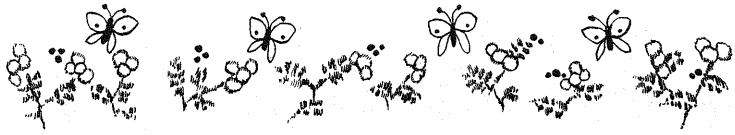


時々いただいた原稿の行数がオーバーしたり、枚数足らずだったりする。また図表や写真が入って予定頁数が変わってしまうこともしばしばある。すると頁調整が必要になる。そんな時、原稿の追加はいつも津守先生に急拠お願いして助けていただいた。先生は内外について驚くほどたくさんさんの知識を持っておられるので、お願いする度に新しい資料を提供して下さるのであった。

また、このようなこともあった。その号の予定にはなかったのであるが、頁数の都合で急拠、坂元彦太郎先生の講演を記録整理したものを掲載することになった。『幼児の教育』誌のスタッフでもいらつしやる先生は簡単に承諾して下さると思つたし、先生のお宅が私の住居に近かつたこともあり、夕刻直接にその原稿を持つてうかがつた。先生は「家まで押しかけてきたのだから緊急だね。緊急なのは引き受けないことにしている。それに、講演と書きことばとは違うから、書き直さなければならぬから、お断りッ！」といたずらっぽくおっしゃつた。横にいらした奥様が、「あら、そんなこと言わないでやつておあげなさいよ」とニコニコしながら言われた。すると先生は現金なことに「では、特別に急いで書いてあげましょう」とおっしゃつた。

翌日に「出来ましたよ」と新しく書かれた原稿をお渡し下さつた。おかげでその月号も支障なく発行が出来たのである。

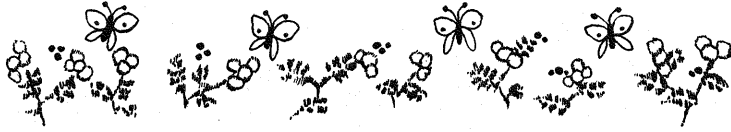
その頃協力委員でおられた牛島義友先生に巻頭言をいただいた時のことである。あ



る日「メ切日が近い」と先生にお電話をしたところ、愛育研究所にお出かけになる日を示され、そこで原稿を頂戴することになった。約束の日にお訪ねすると、その場で先生が口述し、秘書の方が筆記なさった。私は先生のいつもと変らぬ骨の通ったお話に聴き入っていた。「はい、ここまでで何枚になっていますか」「九枚と十六行です」「では、もう少しね」とおっしゃって、残り四行で本文の締めくくりをなさり、「お待ちどうさま」と原稿を下さった。すごい！ 内容もすばらしかったが、単に慣れていらっしやるだけでもなく、先生の能力の本質の一端を垣間見たような気がして、今もその日のことをまざまざと思い出すのである。

そのほか、当時保育の現場におられ、意欲的に次々と試みをしておられた先生方が、その実践状況を聞いてほしいと、津守研究室を訪問されることがあった。夕方遅く、勤め帰りに寄られるのである。そこで急拠、幾人かも加わって勉強会が開かれる。とても良い現場経験であったから、御持参のなぐり書きをいただいて整理し、原稿にさせていただいたこともある。皆、若い意気に燃えていた。今その方々は、保育者養成に精進しておられる。

津守先生の御指導のもとに共編した『幼児の教育 原理と研究』は、その頃『幼児の教育』誌に掲載された論説の中から抜粋して一書にしたものである。出版された時、及川先生は私の今の職場で幼児教育科長をしていらっしやあって、大変お喜びにな



り、その時のお顔は今も忘れられない。今は絶版になって久しいが、幼児教育の考え方や保育実践向上のための研究例などを納め、現在でも十分活用できる基本的な資料を含んでいる。これこそ一〇〇年を迎えた『幼児の教育』誌の変わらぬ姿を示したものと思っている。

例えば元保育学会会長・故山下俊郎先生の「現代の誤った知育偏重の準備教育を排し、生活指導に中核をおく」ことの正しさは、今も変わらないのである。

一〇〇巻の記念にあたり、かつて私がお手伝いした当時のことを思い出しながら筆をとらせていただいた。その頃の日本の保育界に多大な貢献をなさつて故人となられた先生方や、今もご活躍の先生方との出会いを、なつかしく想起すると共に、感謝申し上げている次第である。

新しい世紀に向けて『幼児の教育』誌の一層の発展を祈っている。

(洗足学園短期大学)